

のコニーデ斜面を先に駆け下りてしまい、松井さんを置き去りにしたのは友達甲斐なかったと言わざるを得ない。少し位のいたずらには、ニコニコして眺めていたが、脇でみていて腹が立つようなことが何回かあったであろう。そういう時には、眼鏡がきらりと光るのである。

原稿用紙にきちんと講義ノートを準備され、それを読みあげる方法は、消したり書いたりの大変な労苦を伴う仕事である。聴く方にはそれだけの手間がかかったことが分からないので、折角の滋味を汲まずに終わることも稀ではない。私はしばしば、その講義を、或は研究の記録を公刊してくださいとお願いするのだが、なかなか肯いて下さらない。後の者が同じ苦勞をし、ときには誤った方向に踏み入れないためにも、分布や地域理論についての著述があることが望しい。この願いに対して松井さんは、まだまとまらないからと言う。まとまったら研究者の生命は終わってしまうので、まとまらぬことを発表して、多くの批判を受けることが学界全般の進歩につながると思うのである。一層の御健勝を祈上げる次第である。

“都づくりと英雄”

尾原信彦

皆さんご存知の研究学園都市は、建設計画が既に具体化して、その輪郭もほぼでき上り、各機関の一斉移転を残すのみ、あと数年で典型的な機械文明の砦が出現することでしょう。さて筑波のように今まで市街地らしい中核の無かった平坦地に、20万ほどの都市ができると云うのですから、権力者が一旦その気になれば、何でもこんな風にできるものちお思いになる方が多かろうと存じます。

古来、英雄あるいは大政治家と云われるほどの人物ならば、首都を新たに造営する位の実力があるという説があります。古くは難波の津に都した仁徳帝、近江大津京で即位した天智帝、寧楽の都に遷都した元明女帝、(天智天皇の第4皇女(阿倍皇女)で、草壁皇子の妃となり、文武天皇の母である。女帝8年間の在位中に遷都(和銅3年)と古事記の完成(和銅5年)が特筆される。なお草壁皇子は、高松塚壁画古墳の被葬者の最有力な候補者の1人として挙げられている。(直木教授談)をはじめ、平安京に都城を計画して奠都した桓武帝、鎌倉に幕府を構えた頼朝、大阪に城市を築いて天下に号令した秀吉、江戸を開府して諸大名を従えた家康など、いづれもその範疇カテゴリーに属する人材であるとする声もあります。

しかし日本が近代国家になってからは、ずっと東京(江戸)に首都が固定され、敢えてこれを他所に移そうと謀った政治家は現われまいと思われていました。ところがこのたび田中総理は列島改造という風呂敷を大きく広げ、首都こそ移しはしないが、その代り列島全体の骨組みを思い切って改変し、巨大都市の機能を地方に分散すべく、新25万都市を全国に百ばかり造ろうと云うのですから、国民はびっくり仰天しながらも、拍手喝采したわけです。

さて都造りが不調に終わった例も無いわけではありません。持統女帝の設営した12条8坊よりなる藤原京は、16年で寧楽に移り、その平城京に見切りをつけて移ろうとした桓武帝の長岡京も、造営半ばで廃都となり、平安京に切替えられました。史書ではその永続性の無かった原因に、権力闘争・財政破綻、さらには怨霊^{おんりょう}の祟りなどを挙げ、それぞれ史料に則して述べていますから、敢えて否定は致しません。たゞリアルな面を重視する私どもは、あるいは事前の調査なり、準備なりの欠陥が地の利・天の恵に背いた杜撰^{ずさん}な設計をもたらし、造営中もしくは完成後に不利不便を露呈させ、人の子の住める都市の機能を発揮せず、放棄の止むなきに立到ったのだと解釈したくなります。

私どもは、土地を特徴づける地相とその土地を他の地方に結ぶ脈絡を採上げる丈けでも、本質にアプローチできるような気がします。土地の水・天候・山河の形勢ならびにそれらに起因する災害に触れてのち、野獣からバクテリア(疫病)、樹木から薬草などの生物環境を尋ね、続いて物資の需給、ひいては市場の成立のための交通系がどうあったか、多人数の移動(治安行動)にうまく利用できたかなどの懐古も大切でしょう。こんな風に分析してみると、自然交通路の存在が決定的な主役で、環境の良否は副次的であることが判ります。琵琶湖—淀川(木津川を含む)—瀬戸内海という脈絡上に、難波・平安・大津・平城、(平城京は木津川畔より距つこと僅か6kmである。)の都城が沿っており、とくに上代日本文化の母とも云える淀川水系が鮮かに印象づけられます。下って中世以降は、東国の台頭と共に重心が東にずれたため、関八州を^{よぎ}過って奥州に向う往還沿いに、首都の遷移機運が生じました。モチーフとして軍治を前面に出せば、複郭陣地である鎌倉が、同じく開発を前面に出せば、水陸の便の優る江戸が、位置決定に際して登場させられたことが認められます。

列島改造論でも、まづ新幹線と高速道路がその根幹であり、その波及効果で新25万都市はおのずと成立することが読み取れるだけに、田中構想は流石に非凡と評されるところでしよう。英雄を^な称える表現に、「力は山を抜き、気は世を^{おほ}蓋う」(史記、項羽紀に「力抜山 氣蓋世」と云うのがあります。山勝ちで険しい日本列島に、長距離の交通系を整えようとすれば、無数のトンネル掘^{さく}は避けられないでしょう。総理よ！ 大いに岩山を^く削り抜いて、名実ともに英雄になって貰いたい。(47年10月22日)